

小さな手で伝える大きな伝統

司会

篠路と新琴似で農村青年を中心に演じられた歌舞伎が始まったのは、今から約百年前の明治三十年代半ば。大正から昭和の初めにかけて一度幕を閉じましたが、地域住民が中心となって結成した篠路歌舞伎保存会と新琴似歌舞伎伝承会により、それぞれ現代に復活しました。今日は、篠路歌舞伎保存会と篠路中央保育園の皆さんにお話を伺います。



宮崎さん 篠路歌舞伎保存会は、かつてこの地域で盛

んだった歌舞伎の歴史を地域の皆さんに知ってもらおうと、昭和六十年に地元有志が設立したものです。今は保育園児だけの取り組みですが、小学生や中学生にも広がるよう、地域ぐるみで協力して一歩ずつ進めていきたいですね。



林さん 保育園年長児のカリキュラムに採用したのは昭和六十一年から

です。その前年、園の三十周年記念事業で私たち職員が「創作歌舞伎・保育園五人女」を演じ、観客の拍手や温かい声援に大きな感動を受けたのです。子どもたちにもそれを体験してもらいたくて。



長津さん 歌舞伎を演じることで、見てもらえる、喜んでもらえる、そして受け入れてもらえることを経験し、それが子どもたち自身の喜びと自信につながっていますね。私たちも、子どもたちから学ぶことが数多くあります。



秋元さん 練習を始めたばかりのころは、泣き出す子もいます。でも、

周りから励まされながら頑張るうちに、やがてお互いに競い合うようになり、あつという間に上達するんです。そんな子どもたちの姿は、私にも活力を与えてくれます。**会場の父母** うちの子どもたちは、練習が始まったばかりのころは、ずることもありませんが、せりふを覚えてからは当日の舞台を楽しみにしていましたね。小学生になってからも積極的に発言するなど、経験が生きています。

司会

皆さんのお話を伺いすると、この篠路歌舞伎の伝統を次世代に伝えていくという強い気持ちと情熱を持って支えている人たちの力が、地域に芸術や文化を広め、地域の活力として生かされています。ということがよく分かりました。

芸術・文化の薫るまちへ

司会

ではここで、上田市長から、今日の篠路子ども歌舞伎も含めて、芸術・文化への思いや今後の政策についてお話しください。

上田市長

私は皆さんに「芸術・文化が薫る街づくり」を進めていくと約束いたしました。どうしてかという点、明治維新後の開拓時代に入植した人たちは故郷を思いながら協同で作業する中で地域コミュニティを形成し、自分たちの文化を生み育ててきました。しかし、快適に暮らせる環境が整えられた大都市になると人と人との結び付きが弱くなってくるんですね。私たちが心をつなげて、このまちに住んで良かったと思えるようになるためには、「モノ」ではなく「精神的なつながり」が必要なんです。そこで、多くの市民の方が文化や芸術などを大切にして、みんなが「良かった」と思えるような心の財産を作り上げる活動を育てていくため、そのような約束をさせていただきました。

昭和六十年に復活した篠路歌舞伎も、見る側の地域の人と演じる側の子どもたちが感動を共有できる文化なんです。そのような結び付きが、自分たちのまちを住み良くする火種であり、それをたくさん作るために芸術や文化を大切に



石黒区長 区では、篠路と新琴似の歌舞伎や藍染めなどの伝承に取り組んでいます。このような伝統文化を守り、育てる取り組みというのは、区だけではなく、札幌市全体の貴重な財産として、全市的な観点からその保存、継承、振興に当たっていったらいいと思いますね。

宮崎さん

市長の言葉を聞いて、全市的に認知されたという気持ちになりました。これからも大事に育てていきたいと思っています。

来場者から

かつて歌舞伎の舞台があったこの地に、花道や音響設備が整った施設を作ってもらい、伝統文化を引き継いでいきたい。

上田市長

希望はよく分かるんですが、お金がないということがありまして。そのため、まずは教育文化会館や区民センターなどの既存の施設を誰もが使いやすいものにしていきたいですね。また、学校の空き教室を練習場所として利用できるようにすることも考えていきたいです。ぜひ、多くの人たちに発表する喜び、演じる喜びを経験していただき、そしてそれを見て素直に感動できる札幌市民が増えてほしいものです。